「月間 電通報 1月号」（電通）

2018年1月22日発行

明日のデザイン

みんなが、当たり前に映画を楽しめる世の中を

平塚千穂子（ひらつか・ちほこ） シティ・ライツ代表、シネマ・チュプキ・タバタ代表

早稲田大教育学部卒業後、飲食店に勤務。その後、早稲田松竹のスタッフに。2001年、バリアフリー映画鑑賞推進団体シティ・ライツを設立。03年、第37回NHK障害福祉賞優秀賞を受賞。16年、第24回ヘレンケラー・サリバン賞受賞。

視覚障がい者も、映画に興味あります

もともと映画を見せる仕事をしたい、という思いがありました。それで、とあるコミュニティーに参加したときのこと。私はチャップリンのサイレント映画「街の灯」が好きなのですが、これを目の不自由な人たちに見てもらいたい、という企画を立てたんです。

でも、視覚障がい者の人たちはどう思っているんだろう？ そもそも映画に興味があるのかな、こんなことを言ったら怒られるんじゃないか、という怖さもありました。それで、視覚障がい者と晴眼者が一緒に活動している朗読劇の「こうばこの会」というところに話を聞きに行ったんです。

そうしたら、びっくりしました。晴眼者だと思った演出家が視覚障がい者で、晴眼者の役者さんが怒鳴られて駄目出しされていたりするんです。先入観を覆されましたね。

話を聞いてみると、映画は、周囲で話題になっていたりするのですごく興味はあるんだけど、あきらめている、と。舞台はまだ人の動きとかが分かりやすいけど、映画は瞬時に時空が飛んでしまうじゃないですか。場面転換を教えてもらうだけでも随分違う、という意見もありました。

シネマ・チュプキ・タバタ

調べてみたら、日本ではあまり実例がないのですが、海外では当たり前に音声ガイド付きの上映が行われているのです。音声ガイドとは、場面転換やせりふの隙間に、視覚的な情報を補うナレーションのこと。全米では、そういった劇場が100館以上もありました。

これは確実にニーズがあるんだ、ということが分かって、シティ・ライツという団体の設立に踏み出しました。もちろん、その名称は大好きな「街の灯」から取りました。最初は、音声ガイド研究が活動のメインだったんです。映画関係者だけでなく役者さんや学者の方などさまざまなメンバーが集まり、視点の違いが分かってすごく勉強になりましたね。また、当初企画した「街の灯」の上映会は残念ながら頓挫してしまったんですけど、こうばこの会の皆さんとの交流は続いていきました。

「千と千尋の神隠し」が見たい！

障がい者の意見交換をする場として、メーリングリスト（ML）もつくりました。2001年の夏、「千と千尋の神隠し」が見たい！という書き込みがあったんですね。正直、具体的な活動はまだ少し先かな…と思っていたんですけど、当事者にとっては「話題になっているから、今見たい！」なんです。それで研究会のメンバーがマンツーマンで耳元で場面説明をささやく、という鑑賞会を実施しました。言ってみれば、人間音声ガイドですね。希望者も、6人ほど集まりました。劇場には、平日の混まない時間帯で前の方の席ならと許可をもらって。

リアルタイムで音声ガイドをするのは、大変でした。瞬時に言葉が出てこなかったりして。でも、良かった、とMLに書き込む人もいて、その後も継続することになりました。

参加希望者が次第に増えてきたこともあり、途中からは映写室から音声ガイドの声をFM送信機で飛ばしてイヤホンで聞いてもらうことにしました。これで、周りのお客さんに迷惑をかけることも、人数制限をする必要もなくなったわけです。「ローマの休日」のときは、参加者が200人も集まりました。

活動を続けてきて、次第に劇場や映画会社の意識も変わってきたように感じます。最近では、UDキャストという音声ガイドのアプリがあり、東宝の作品には、全て対応しています。

全ての人に開かれた映画館を運営

こうした活動に当たって意識するのは、より多くの人に、映画をどれだけありのままに伝えられるか、ということですね。視覚障がい者は、その分他の感覚がとても鋭いです。音が果たす役割も大きいし、想像して楽しむという側面もあります。それぞれの人の、さまざまな見方。映画は、画面だけじゃない。つくづく、いいかげんに見ちゃいけないな、と改めて思いました。

16年9月にシティ・ライツが設立した映画館、シネマ・チュプキ・タバタ（東京・北区）では視覚障がい者だけでなく、全ての人が映画を楽しめるようにしています。ユニバーサルシアターという考え方ですね。全席にイヤホンジャックを装備。UDキャストが対応していない作品の音声ガイドはつくりますし、赤ちゃんや小さいお子さんと一緒に見られる親子鑑賞室もあります。車いすで鑑賞するスペースは、一般の劇場だと端っこの見にくいところが多いんですけど、チュプキでは後ろの真ん中、特等席です。聴覚に障がいのある人のためには、日本映画でも日本語字幕を付けて上映しています。

鑑賞会の様子

映画を見て、障がい者の人たちと一緒に笑えた瞬間、本当の涙を流してもらったとき、やってきてよかったなぁと感じます。人生のとてもいいタイミングで、その映画に出合ってもらえた。そのことが、うれしいのです。

人のつながりが広がって映画は豊かになっていく

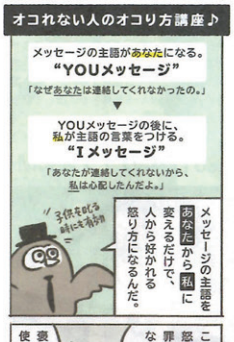
映画館、特にここみたいに小さな映画館を運営していくのは、大変です。ネットで手軽に映像が見られる時代に、わざわざ時間を取って映画館に行く？という状況もありますし。それでも、北区の市民グループとイベントを開催したり、行政とも連携したり。地域とのつながりを大事にしながら活動を進めるうちに、街の人たちも何かにつけ応援・協力してくれるようになりました。

これからは、コミュニティーシネマとしての映画館が拠点となって、人々のつながりが全国に広がっていったらいいな、と思います。後は、例えば音声ガイドも「私は誰々さんバージョンがいい」と選べるようになったりしていくと、障がい者という枠を取り外しても、鑑賞ツールとして豊かになって面白いですよね。

新感覚ラリエーティブルーマンガ
電柱ホースケ
第13話 オコ。

オコれない人のオコリ方講座♪

メッセージの主語があなたになる。
"YOUメッセージ"
「なぜあなたは連絡してくれなかったの。」
▼
YOUメッセージの後に、私が主語の言葉をつける。
"Iメッセージ"
「あなたが連絡してくれないから、私は心配したんだよ。」



※猛禽類

フクロウより
鳩派。
3CRP サトウカオリ AD
※電柱ホースケは電通のクリエーターによるリレーマンガです。

1月号 編集後記

新しい年を迎えた。今年はどんな年になるのだろうか。デジタルシフトのスピードがますます速くなる中、どんな新しいことが起きるのだろうか？ 私たちの生活がどんなふうに便利になっているかを考えるのも楽しいかもしれない。世の中が便利になったとしても、人の気持ちにちゃんと寄り添えるかどうかがとても大切じゃないかと思う。（て）

月刊 電通報（1月号）
通巻4810号
dentsu-ho.com
発行／株式会社 電通
〒105-7001 東京都港区東新橋1-8-1
コーポレートコミュニケーション局
メディア部 ☎03（6216）8047
<送り先変更は、下記フォームにご入力ください>
https://contact.dentsu.jp/m/dentsuho